



函 館

胆振西部医師会 御園生 潤
北湯沢温泉病院

北の玄関口「函館」。春夏秋冬に道内外あるいは外国からの多数の観光客が訪れ、その独特の雰囲気と景観を堪能して帰途につく。いわゆるリピーターも多いという。青函トンネルの完成による青函連絡船の廃止があったが、函館・大沼を中心としたエリアは道南の一大観光拠点へと成長を遂げた。

「函館山からの都市夜景ほどきれいなものは世界でもないでしょう」と観光関係の方々はその素晴らしさにお墨付きを与える。街の南側に函館山という絶好の展望地が存在すること。日本の家屋の大半は日当たりの良い南側に居間と窓を設けており、夜になると南側に明かりが灯り、その光が外に出てきて夜景を形成するのであるという。

天与の条件の他に、函館には明治以降の文化遺産である建造物が多い。しかも、バラエティに富んでおり、教会でもロシア風あり、ヨーロッパ風あり。木造二階建の西洋館、中国風、日本風の建物も。それらが程よい範囲に分布しており、散策して歩くのにも絶好であるといえる。現在、函館では元町地区を中心に23箇所の建物がそれぞれ趣向を凝らしてライトアップされており好評であるという。

この他、函館の魅力を語っただけで優に一冊いや、それ以上の本が完成されてしまうのではなかろうか。

本年4月に東宝系劇場で公開され、大ヒットした邦画「星に願いを」は、成長株の男優・吉沢悠と中堅女優・竹内結子が好演した。この物語

は2001年に香港で公開され、アカデミー賞3部門を受賞した『星願 あなたにもういちど』のリメイク。携帯電話やメールが爆発的に普及し、一見、人と人のコミュニケーションが活発に取り交わされているように見える現代。しかし、本当の気持ちは、はたして大切な人にきちんと伝達されているものかを主題にした良質の作品であった。この作品では函館でオールロケ撮影が敢行され、新島橋・相馬倉庫、八幡坂、赤レンガ倉庫、路面電車・市交通局駒場車庫、西波止場、旧ロシア領事館、外人墓地、遺愛女子中・高校、大森浜、喫茶店・モーリエ、そして函館山の夜景など、さまざまなロマンチックスポットが登場する。映画のストーリー展開も見事であったが、こうした函館風情をスクリーン上で目のあたりにし、最近、訪れる機会のないこうした街並の素晴らしさを再発見したように思う。

函館のこうした美しさは、数々の映画・TVドラマのロケ地に選ばれることでも実証済であろう。森田芳光、降旗康男、深作欣二、あがた森男など、多くの映画監督の心を射抜いている。

札幌からは、航空機で1時間弱、JRの「スーパー北斗」で3時間強。余裕があれば、久しぶりにこうした街並みをのんびりと鑑賞してみたいと思う昨今である。



火の玉の話

札幌市医師会 濱田 幸治
はまだ内科・神経内科クリニック

僕が、小学校2年生の夏の話である。その頃、僕の家のすぐそばに4軒長屋が数棟並んで建っていた。4軒長屋といえは今の人には想像もつかないかも知れないが、僕たちの子供の頃には珍しくもなく、とくに炭鉱の抗夫さんの住宅はほとんどが4軒長屋であった。それぞれの一戸の間口は狭く、部屋はほとんどが2つでトイレ、風呂はなかった。水も共同で使用するものが外にあり、自分の家で使う分だけここから毎日汲んで家の水瓶などに貯めて置いたものだ。家の近くの、この4軒長屋には隣町の炭鉱に勤めている人が住んでおり、通称引き上げ住宅と呼ばれていた。カラフトや様々な外地から引き上げて来た人たちが住んでいたからなのか、いずれにしろ、比較的貧しい人たちが家族で住んでいた。

その住宅から少し離れたところに構造はほぼ同じであるが、2軒長屋が数棟立っていた。その1軒のある家に、腰の曲がったおばあさんがおり、そのおばあさんは足が悪くほとんど歩けず、いつもストーブの前に座り込んでいた。どういうわけか、レンガをストーブの上に乗せて暖め、それを軍隊の毛布の切れ端に包み、いつもお腹に当てていた。僕たちはこのおばあさんが、冬でも夏でもいつもこうしている姿が何か不思議であると同時に少し不気味なものを感じていた。僕は、このおばあさんが気になってしょうがなかったのも、しばしば、盗み見るように家の中を覗いていたりしていた。おばあさんはいつも同じような格好でストーブの前に腰をかがめて静かに座っていた。今、考えてみるとあのおばあさんは胃潰瘍か、あるいは胃癌か何かでお腹が痛かったので腹部を暖めることで紛らわせていたのかも知れない。しかし、その頃はまだ気軽に病院に行く時代でもなく、恐らく貧しいために治療にもいけなかったのかもしれない。ある時、いつものように家の中を

覗いていると、おばあさんと目が合ってしまった。僕にとっては意外であったが、おばあさんは優しくな目で僕を見、おいでと手招きをした。少し尻込みをしたが恐る恐るそばに行ってみると、“これ、食べなさい”と言って^{あめ}飴を2個ほどくれた。僕たちの子供の頃では飴2個でも、貴重なおやつであった。それからは、そのおばあさんがあまり怖くはなくなっていた。

その年の夏のある日、そのおばあさんが亡くなった。とうとうあのおばあさんも亡くなったか、とかわいそうな気がしたが、僕はそれ以上の感慨は持たなかった。

そのおばあさんが亡くなった夜、たまたま、家に来客があり、僕は街までお使いに行かされることとなった。暗くなっていたので、僕だけでは不安だったため僕と次兄が行くことになった。次兄と僕は歩きながら、引き上げ住宅のおばあさんが亡くなった話をしながらお菓子をかうために菓子屋に向かった。

“何となく怖いから、あそこの前は通らないようにしようね”

“うん、そうだな”

などと話しながら菓子屋で頼まれたお菓子を買い、店を出た。街には数10メートルおきに街灯が立っていた。その頃の街灯は裸電球に丸い笠があるもので、決して明るいものではなかったが、なんとなく^{ふぜい}風情はあった。その店を出て、すぐ左に折れる。そこから20メートルほど先は四つ角になっていて、農協の大きな建物や土建屋さんなどが並ぶ街の中心部であったが、回りは今のように明るくなかった。少しごみごみしており電信柱なども立ち、混んでいるところだった。

何気なく空を見上げた僕は、農協の屋根から少し離れたところに、何か異様なものが浮かんでいるのを見つけた。それはバレーボールを少し小さくしたほどの大きさで、色は赤や黄色、青などを織り交ぜたような何とも不気味なもので、これがゆっくりと右から左に移動していた。はっきりした尾はなく残像として、尾のような感じが残る。

“あれ、火の玉ではないだろうか”僕が言った。

兄も空を見上げて、少し間をおいて言った、“う

ん、そうだな”

兄の声も幾分うわづっていた。

“怖いから見ないでおこうね”

“うん”

短い会話を交わしたあと、僕たちは無口で、ただ足だけ進めた。数歩進めてから、気になって僕はまた空を見上げた。するとあの異様な物体は5～6メートル先に移動しており、僕の見ている前で、うそのようにパッと消えてしまった。それから僕たちは、足を速めるでもなく、はしゃぐで

もなく、黙々と歩いて家にたどり着いた。家に帰ってからも誰にもこの話はしなかったし、その後もほとんどこのことを話題にしなかったように思う。

十数年後、あれは幻覚だったのだろうか、僕だけに見えたのかが不安になり、次兄にこの時のことを確かめてみた。兄はその時のことははっきり覚えていて、“あれはなんだったのだろうか”と、遠くを見るような目で答えた。

日本がSARSで 汚染されなかった理由

札幌市医師会 浜島 泉
北 央 病 院

8ヵ月にわたって世界を震撼させたSARSの終息宣言を、世界保健機関が7月5日発表した。再発がないかどうかの見通しはまだない。

ある講演会で、日本がSARSで汚染されなかった理由について質問された。伝染病予防法を廃止して感染症予防・医療法を施行したから、と答え、この法律の経緯を説明することになった。伝染病予防法は1897年に施行された。近年、疾病構造の変遷が言われるとともに、新しい強烈な感染症にどのように対応すべきか、が検討され、性病予防法、エイズ予防法の見直しを含めて、感染症予防・医療法が作られた。この新法では、感染性疾患が緊急度に応じて4類に分類され、それぞれ必要な対応が示された。

4類にインフルエンザ、はしか、マラリア、ツツガムシ病、エイズ、狂犬病など、3類に病原性大腸菌感染症、2類にポリオ、コレラ、赤痢、ジフテリア、腸チフス、パラチフスが分類されている。1類はペスト、ラッサ熱、コンゴ出血熱その他知られていない伝染性疾患となっており、個人の人権擁護と予防管理の双方の側面を考慮しながら、病気の性格によって対応を分けている。また、プライバシーに配慮するとともに情報の収集と、国民への情報提供を十分に行うことを定めて

いる。

このたびのSARSについては、WHOがまず、その危険性について昨年11月、警鐘を打って警戒を喚起した。この時点で厚労省が、医療機関、医師団体、報道機関、行政機関にこの情報を配信した。WHOが世界のサーベランスを、日単位、地域単位で発表した。エボラ出血熱のときには、アフリカ西部のどこかで特異な病気が流行して終息したが、恐ろしい病気だそうな、という程度の認識しかなかったものが、このたびのSARSの流行では、その時点その時点の流行状況が日替わり情報で把握できることになった。

また、国々の対応の差と、まん延状況の差が如実に衆目にさらされるため、専門家が認識すると時を同じくして世界中の関心ある人が理解した。さらに、このたびは大都会を直撃したために情報も密に報道された。社会経済活動に直結し、文化スポーツ行事にも波及するという事態が現出した。旧時代的な情報隠匿の対応をしたところでは、感染制圧に手間取るという教訓が即刻世界規模で伝わるということになり、政治的な影響も出た。情報社会では、それにふさわしい手法があるということが明らかになった。

自分たちの実践から教訓を考察する。院内感染事件などの教訓から、医療機関での院内感染対策委員会の整備が進んでいたことがSARS対策の基盤になった。WHO、厚労省の指導を受けて、われわれの病院でも院内感染対策委員会で、情報収集と職員への情報提供を行った。ついで、初診問診での海外渡航歴調査と体温測定を徹底した。消毒薬剤を検討して、塩素アルコールを採用した。

マスク、防護衣の準備も行った。

感染対策は初動が大切である。ここで手違いが生ずると、様々な迷いが生じたり、不信感を生んだりして、その後の手順に大幅に響く。したがって、ガイドラインと責任者・指揮系統を定めて、躊躇せず発動する必要がある。手をこまねいていたことを反省するよりは、手を下したことを反省する方が概して罪が軽い。

リチャード・プレストンという新聞記者が書いた「ホットゾーン」という本が出ていて、日本では、高見浩という人が訳している。数年前に、アフリカ西部で伝染病が発生し、急激なまん延と致死率が高いということで話題になった事件のドキュメントである。この病気は、エボラ出血熱とか西ナイル病という名前と呼ばれることになり、感染症予防法に組み入れられた。

SARSの病原は新型のウイルスであるが、感染力は高熱期に強いだけで、長期にわたるものではないことが知られており、徹底的に隔離してしまえば制圧可能であるという。ところが経過中、患者の旅行に伴って国境を越え、あるいは航空機の中で、まん延したことが考えられる事例があっ

た。スーパースプレッダーなどという学術語が、素直に受け入れられた。グローバリゼーションの弊害と言って片づけてしまわないで、この時代らしいまん延に留意して対応する必要がある。日本でも旅行者の立ち寄り先を特定して、徹底的に検診と予防対策を行った結果、汚染されていなかったことが判明したが、それでも一定期間は緊張が走った。それも医療従事者が関与していたというから、情報時代の医学医療学習の重要性を学ばされた思いだった。それにしても公衆衛生の底力の発揮は、久々に目をみはる思いであった。

診断確定根拠や予防法がまだ明確でないという。これらの面の研究もすすめてもらいたい。病原性大腸菌感染症もSARSも年齢による罹患率、致死率の差が見られたし、免疫力による病状の差もあったという。O157のとき、ヨーグルトとかお茶とか水道水に予防効果がありそうだとということで研究が行われたと聞いている。このたびも、そのような安価なもので予防できるなら意味のあることであり、研究の成果が発表されることを期待している。

お知らせ

北海道医師会創立56周年記念講演について

来る11月9日(日)、北海道医師会創立56周年記念講演を下記のとおり開催することといたしました。

講師には国際法、バイオサイエンスの専門家であり、ユネスコ国際生命倫理委員会(IBC)委員長の京都大学大学院法学研究科 位田 隆一教授をお招きし、「新しい医療の展開と生命倫理」をテーマにご講演いただくことといたしております。

参加ご希望の方は、当会総務課宛お申し込みくださいますようお願いいたします。

記

日 時 平成15年11月9日(日)

午後3時30分～4時30分

場 所 札幌グランドホテル 2階「金枝の間」
札幌市中央区北1条西4丁目

TEL 011-261-3311

講 師 京都大学大学院法学研究科

位田 隆一教授

テーマ 新しい医療の展開と生命倫理

申込先 北海道医師会総務課

TEL 011-231-1433 FAX 011-221-5070

E-mail soumu@office.hokkaido.med.or.jp